６項目評価（シートの記入例）

事業名：Ａ国Ｂ県の環境保全（2001～2003 年度）

評価者名：山田太郎

評価日付：2004.3.30

＜実績確認＞

	計画	実績
情報源	３ヵ年計画書、NPO 会報	現地報告書、NPO 会報
得られた情報	各村の苗畑管理委員会が予算の作成をし、当 NPO が適宜助言することで将来の自立運営を目指す。 N 村では、郡森林局から依頼されたミツマタ 5,000 本を生産する。共有地で試験的に栽培していた薬草を 15,000 本生産する。 Ａ村では、果樹と、牛の飼料やほうきになるアムリショの生産に力を入れる。 Ｔ村では、ミツマタと飼料木の生産に力を入れる。 Ｋ村では、植林の必要性が薄れてきたため、個人用の飼料木の生産を止め、共有林にミツマタを植える。紅茶栽培を導入するため、生産地のＺ村を訪問し、視察する。	N 村では、15,429 本の苗木を生産し、薬草を 3,540 本生産した。Ａ村では、13,131 本の苗木を生産した。Ｔ村では、6,151 本の苗木を生産した。キバンでは、8,823 本の苗木を生産した。4 カ村の苗畑で合計 47,074 本の苗木を生産し、そのうち 18,430 本を共有地に、18,366 本を私有地に植林した。植林地への家畜の侵入を防ぐフェンスを 2,736m 設置した。 Ｔ村・K 村では紙の原料になるミツマタや竹を、Ｎ村では薬草やほうきになるアムリショを、Ａ村では柑橘類の果樹を換金用として栽培している。 苗畑運営トレーニングをＭ郡の森林保全局と合同で行った。 現地オフィスで各村の森林委員会、苗畑管理人・スタッフ・森林保全チームのメンバーが集まり、住民による 苗畑自立運営のためのワークショップを行った。 Ｍ郡の森林保全局と合同で、Ａ村とＮ村で 9 名の苗畑管理従事者を対象に、組織的な苗畑運営と生産性の向上、換金作物や薬草の導入、病害虫の予防などについてのトレーニングを行った。 Ｋ村の代表者が、換金作物としてお茶を生産しているＺ村を訪問した。

＜目標達成度の５段階評価＞

１　　２　　３　　④　　５

不適　　ある程度達成　　達成

＜６項目の観点からの評価＞

１．妥当性（プロジェクトの計画は妥当であったか？ 地域住民のニーズに合致していたか？）

情報源	得られた情報
NPO 年度報告書 NPO 会報 スタディツアー報告書 現地研修報告書 ワークショップ報告書	**Ｎ村**では、苗木の目標生産数は 15,000 本で、実際の生産数は 15,429 本。薬草は 3,540 本生産。**Ａ村**では、苗木の目標生産数は 15,000 本。薪や飼料に加えて柑橘類の生産に力を入れ、昨年からオレンジ・レモンなどの果樹の苗を育て始め、牛の飼料や箒になるアムリソの栽培も行っている。2002 年度の実際の苗木生産数は 13,131 本。**Ｔ村**では、苗木の目標生産数は 10,000 本。そのほか、ミツマタと飼料木の生産に力を入れる計画。2002 年度の実際の苗木生産数は 6,158 本。**Ｋ村**は、苗木の目標生産数は 12,000 本。地区内にあまり植林する余地がないため、既に造成した共有林内にミツマタを植える。2002 年度の実際の苗木生産数は 8,823 本。 Ｍ郡の森林保全局と合同で、Ａ村とＮ村で 9 名の苗畑管理従事者を対象に、組織的な苗畑運営と生産性の向上、換金作物や薬草の導入、病害虫の予防などについてのトレーニングを行った。 Ｋ村の代表者が、換金作物としてお茶を生産しているＺ村を訪問した。 住民による 苗畑自立運営のためのワークショップが、現地オフィスに、各村の森林委員会・苗畑管理人・現地スタッフ・森林保全チームのメンバーが集って行われた。

評価結果：各村とも、苗木生産数が目標を下回っている上、住民に配布された苗木数はうち 7〜8 割程度であることから、住民のニーズと計画が一部で合致していない可能性がある。ミツマタの栽培は、栽培の仕方を事前に十分普及するなどの準備が足りなかった。Ｋ村で、茶の栽培を始めるために村人がジリを訪問したという時期、また代表者の人選は適切だった。

２．有効性（目標達成度：プロジェクトの実施により期待された効果がえられたか？）

情報源	得られた情報
同上	**Ｎ村**では、生産した苗木の約 7 割は配布されている。薬草も 3,540 本生産され、約 7 割が配布された。苗畑運営基金は 17,519.2 ルピー増えた。**Ａ村**では、苗木は生産数と同じ数が配布された。苗畑運営基金は 24,467 ルピー増えた。**Ｔ村**では生産した苗木の 84%が配布された。苗畑運営基金は 9,880 ルピー増えた。**Ｋ村**では苗木の配布数は生産数の 5 割。苗畑運営基金は 11,459.5 ルピー増えた。2002 年 1 月に茶園とミツマタ生産地を見にＺ村を訪問した。 Ｍ郡の森林保全局と合同で、Ａ村とＮ村で 9 名の苗畑管理従事者を対象に、組織的な苗畑運営と生産性の向上、換金作物や薬草の導入、病害虫の予防などについてのトレーニングを行った。

評価結果：森林保全（森林再生）の効果は得られた。薪、材木、飼料などとして有効かつ計画的に利用されている。森林はみごとに再生され、期待した成果は得られた。植林後の活着率は約 8 割と、適正に植林が行われ、有効性は高いと言える。

３．効率性（投入の質・量・タイミングは適正であり効率的であったか？）

情報源	得られた情報
同上	**Ｎ村**では、苗木の生産数は 15,429 本。薬草は 3,540 本生産し。苗畑運営基金は 17,519.2 ルピー増えた。**Ａ村**では苗木生産数は 13,131 本。苗畑運営基金は 24,467 ルピー増えた。 **Ｔ村**では苗木生産数は 6,158 本。苗畑運営基金は 9,880 ルピー増えた。 **Ｋ村**は苗木生産数は 8,823 本。苗畑運営基金は 11,459.5 ルピー増えた。

評価結果：苗木の生産に対してどの程度の資材・労力を投入しているのか、レポートに記載がないため、植林の効率性についての評価は難しい。

４．インパクト（期待したインパクト、予期しなかったプラス・マイナスの影響はあるか？）

情報源	得られた情報
同上	Ｎ村では、薬草の苗を生産するなどの成果をあげている。 トレーニングとワークショップは大変好評であり、予想をうわまわるインパクトがあった。 柑橘類とミツマタの需要が増えた。

評価結果：森林は、地滑りや土壌流出の防止などの土地保全のためにも大変役立っている。研修などの実施により住民の関心が高まり、今後、住民自身が積極的に換金作物を生産していくことが期待できる。苗畑管理トレーニングにより、各村での苗畑管理技術が高まったと考えられる。

５．自立発展性（プロジェクトで実施した活動の自立性やプロジェクトの効果の継続性は期待できるか？）

情報源	得られた情報
同上	トレーニングとワークショップの開催やプロジェクトそのものの実践を通して人材がそだった。 苗畑で、苗木の生産が可能になった。 ミツマタが根付いた。 苗畑基金を増額することができた。

評価結果：共有林の計画的利用はできているようであり、継続性・自立発展性が期待できる。しかし、苗畑に関しては現在の計画では自立は困難であろう。自立運営計画ワークショップの開催により、各村と NPO それぞれの意識が高まった。2002～3 年度は、各村とも苗畑運営基金を増やすことができたが、苗畑の自立運営はできていない。

６．住民参加（計画段階・実施段階で住民が十分に参画していたか？）

情報源	得られた情報
同上	村人は、苗木の栽培や植林に興味をしめし、主体的にとりくんだ。 村人は、フェンシングの賃金を自発的に苗畑基金に寄付した。

評価結果：村人が中心となり、苗畑自立運営計画を策定し実施した。各種レポートでは、村人がどのような形で具体的に事業に関わったかまではくわしくはわからない。

＜評価者のコメント＞

評価をするには、換金作物用とそれ以外の苗木それぞれについて、生産数・植林数、樹種、活着率、収支明細など、情報が不足していた。そのため、レポートの様式を改善する必要がある。

現プロジェクト地では関係者の関心が、森林再生よりも収入向上に移っている。

今後 2～3 年のあいだに、残りの植林地（森林再生を必要とする場所）への植林を確実に終わらせ、共有林の計画的利用の徹底を図り、確実に「卒業」しなければならない。

森林保全あるいは生態系保全は、当ＮＰＯが行った事業の中で最も実績があり、効果が上がった事業と考える。この実績を活かし、森林再生を必要としている新たな地域において植林を開始するのが良いのではないか。現地事務所によると、植林を必要としている地域はたくさんあり、地滑りや土壌流出などの問題が起こっていると言う。

換金作物の生産は、立地条件の悪さなどから、まとまった収入を得ることは期待できないため、苗畑自立運営計画について再検討が必要である。